

はしがき

本書は、室町・戦国時代を中心に、中世前期から近世初期までの日本各地の武家拠点の多様なあり方を明らかにするために編まれたものである。

武家の拠点といえば、中世では一般には、在地領主の館がイメージされるかもしれない。そこは主従制の核であり、領主(当主)の排他的な権力(暴力)が絶対的な世界である。こうした拠点が自然に拡大して戦国大名の城下町から近世城下町に発展してゆくと考えられていた時期もあった。

しかし、一九九〇年代以降、室町時代の守護の支配拠点である守護所の研究が進むと異なる様相が目されるようになる。守護所の多くは、古代末期から中世初期の国衙の「場」(空間)を踏襲することで、国衙が有していた一国支配の公的な由緒を引き継いだ。さらに守護所から戦国時代の城下町へ展開するなかで、大名はそれぞれ問題解決能力を高めることで、いわゆる「下からの公権」をあわせて身につけ、それ故にこそ拠点の中心地性を高めることができた。その先に近世城下町を見通すことが可能となる。

本書では、こうした地域における拠点とは別に、京都・鎌倉・江戸という武家の「首都」形成についてもあつかう。さらに、中世においては自律的に営まれていた、寺社・港町・交通などが武家拠点と関係を強めてゆく具体相も説明してゆく。

各論文について、本書の趣旨とかわかる点を中心にそれぞれ簡単に紹介しておこう。

高橋修「常陸佐竹氏本領・久慈郡佐竹郷の復元的考察」は、武家による本領の支配が、農業生産だけでなく、交通や流通の結節点である町場にもおよびること、より広い地域社会への影響力や人間関係の深化による支配の広がりをもなうことを明らかにした。地域的公権力のすがたを活写したといえよう。中世武士の支配原理を主従制のみから説明し、無縁・楽などとの二項対立で論じることが誤りであることを実証的に示す貴重な成果である。

山田徹「室町期荘園制と『守護所』」は、近年の室町期研究の進展に依拠して、先に示した「守護所」イメージに改変をせまる研究である。守護所が国衙を継承した事例は必ずしも多くなく、両者の連続性は認めがたいとした上で、室町時代の一国拠点の多様性を実例をあげて論じた。御料所、大名の所領、有力被官の拠点などが守護の拠点としてすがたをあらわす。また十五世紀までの拠点と比較して、十六世紀の守護拠点は、分国支配上の要地に遷移する場合が多い。守護拠点の出自はより柔軟にとらえ、多様性から説明してゆく必要があることがわかる。

村井良介「戦国期の地域秩序形成と政治拠点」は、公的な文書発給がおこなわれる場を政治拠点とし、幕府によって普遍的におこなわれていた室町期の権利保証がどのように減退してゆくのかを論じた。そして戦国期の毛利領国であった安芸国と備中国を例として室町期との相違を明らかにした。すなわち、これらの国では、戦国領主が大型城郭である本拠を築き、判物を発給し、独自の「領」支配をおこなった。新たな権利保証主体が新たな政治拠点を形成したのである。その上位に、大名権力の政治拠点が位置することで、拠点は重層的なあり方を示す。

新谷和之「近畿地方における武家の拠点形成」は、紀伊国と近江国では、守護の継続性、奉公衆の自立性、宗教勢力の影響力の強さなどが、武家の拠点形成にも反映されたとする。守護の在地での活動が顕著でない紀伊では、守護の拠点は発達せず、奉公衆ら有力在地領主のいくつかの居館が確認される。近江六角氏は観音寺城を築き、家臣の多くを集住させた。豊臣政権は、紀伊では和歌山城をはじめ、港湾をおさえる拠点づくりを展開した。近江では、武家

拠点の移動や新設が著しかった。近畿地方周縁の両国の特徴から、武家拠点のあり方を解き明かしている。

山田邦和「室町幕府將軍御所の変遷」は、足利尊氏から義昭までのすべての將軍の居住地について、文献史料、発掘成果、先行研究を徹底的に精査してその位置・領域を確定し、地図上で表現したものである。二代義詮の「三条坊門殿」と三代義満の室町殿を両軸としつつ、將軍御所は三条通以北の各地に設定された。寺院や家臣の邸宅を宛てる場合もあり、占地の理由はさまざまであった。幕府末期の十四代義輝、十六代義昭の御所は、本格的な城郭の様相を示しており、織田氏・豊臣氏の京都の拠点のあり方につながる変化があらわれているとする。今後、室町時代の將軍御所について論じる際、必ず参照される論文となるだろう。

江田郁夫「鎌倉府の御所と東国武士の拠点」は、南北朝・室町時代の鎌倉にあった御所や武士の屋敷地の実態・役割と東国武士の拠点形成について解明した。東国武士にとって、「在鎌倉」することは、鎌倉公方への臣従を示す行為であり、十五世紀前半には規範となった。ただし、彼らは鎌倉に常住はしておらず、本領と行き来していたとする。下野国小山氏の場合、本領支配のための祇園城が居城（宿城）であり、かつ「館」であった。東国武士の在鎌倉は、豊臣政権の在大坂、徳川政権の在江戸と共通する側面があったという。

谷徹也「豊臣政権による京都の拠点化」は、政権の拠点が置かれ、武士が集住したことが、都市住民にいかなる重みを持ったのかを「課税」の観点から解いた。政権が独占的に入手した生糸を都市共同体に貸し付け、代銀を支払わせたり、木綿などの「あらい」を命じ、政権に返上させた。こうした制度の結果として、富の集積においても天下人に極度に収斂する構造が現出し、それらは居城の天守に納められたという。京都は地子免除を得たが、それを帳消しにする独特の課税がなされたことを論じている。

齋藤慎一「江戸城下の変遷」は、近世江戸の城下町、とりわけ主要街路（日本橋通り）が、中世の江戸城下の継承ではなく、町場の位置を変え、新規の町割りによって誕生したことを丁寧な実証によって明らかにした。古文書や記

録・地誌、絵図だけでなく、発掘調査の成果も多角的に活用している。海面の埋め立て、陸地化の段階も念頭に、歴史的な分析もなされたことで、近世江戸誕生についての考察の決定版となった。

長澤伸樹「中世後期奥羽における都市と流通・交通」は、中近世移行期における都市のあり方が、主に豊臣政権との接触によって大きく変化してゆくことを明らかにした。上方で発達した成文法、町づくりのノウハウが近世城下町の基礎を形作り、周辺地域での市・宿・港町などの変容にまで結びつくという。中央からもたらされる技術・文化・情報、中世の在地の慣習を淘汰し、近世的な法の支配を急速に浸透させた。

天野忠幸「三好氏の城郭と寺社」は、十六世紀の中葉、京都・畿内を中心に領域支配を展開した三好氏のうち、三好長慶、三好実休、松永久秀が拠点を置いた城郭と宗教施設の関係を読んだものである。寺社などの宗教施設は、城郭が設置・発達する以前から存在し、独自の信仰圏を形成していた。三好氏権力は、そうしたネットワークを利用するため、寺社を移転させたり、特権を保障したりしたという。

阿部来「越前の武家拠点と山の寺・港湾」は、発掘成果や歴史地理学的視点による武家拠点の解明と、一乗谷・平泉寺・三国湊の相互比較からなる。朝倉氏の拠点は交通路に沿って進展し、また旧来からの政治拠点を取り込んでいった。武家拠点が城館と村・町・湊・寺社などと一体化して形成されていたことも明らかにした。寺社の開創年代などから一乗谷の内部における都市開発の段階差を提案している。「山の寺」平泉寺や三国湊と一乗谷との間の類似性・異質性を論じ、武家拠点を相対化した。

谷口正樹「戦国期の武家権力と門前町」は、厳島社と杵築社(出雲大社)の門前町が戦国時代に急速に変容してゆくことが、領域を支配する大内氏・尼子氏や毛利氏とどのように関連するのかが、解いたものである。宗教権門のしぼりと、それをほどこうとする都市民や商人たちの活動が門前町の発展に結果し、その果実をつかもうとする大名権力の介入を招く。地域社会の中核都市が、武家の拠点ともされることでどのような変化や葛藤をはらむことになるのか、

多彩な側面から明らかにしている。

関周一「東九州の唐人町と武家拠点」は、唐人町の全体を俯瞰した上で、豊後府内(大分県)、都城(宮崎県)、大隅国国分(鹿児島県霧島市)に設けられた唐人町の立地や住人構成などから武家拠点との多様な関係を説明するものである。政治都市でも港町でも、多様な商人・職人が住み、経済的な中核とするため、唐人町が設定された。唐人町の興隆政策が、当該期の九州における典型的な都市活性化策の一つであったことがわかる。

本書で明らかにされる武家拠点のさまざまな様相について簡単にまとめておきたい。

中世の武家拠点が、狭い意味での武家とその一族・家臣だけで構成されていないことが注目される。武家の拠点は本来的に、居館・城館に加えて、町場や寺社など多様な性格をもつ要素から成り立っていた。主従制のみによって成り立つ拠点はそもそも存在しなかったのではないか。

武家の拠点とは別に、中世においては寺社、門前町、宗教ネットワークが成立し、それらに結びつく経済・流通圏が広がりをもっていた。港町などの交通集落も独自の中心性と発展性をはらんでいた。中世社会は武家だけによって、あるいは武家を中心に構成されているわけでは必ずしもないのである。武家拠点到注目することによって、地域社会の展開のなかで、武家以外の要素の役割が大きいことに改めて気づかされる。

武家は宗教都市や交通集落に寄生し、利用しながら取り込むことで、武家の拠点を経済上の中心地にしたたり、経済拠点を武家の拠点に変えていったりする。十五世紀までの武家による一国支配の拠点は中心地性を備えていない場合もあったが、中世末期にかけて、武家の拠点は領国の要地に移動する。こうしてほとんどの武家の拠点が、一定地域のなかで中核としての地位を獲得してゆく。守護所や戦国期城下町の段階である。

武家の地域統合が進み、大名、戦国領主、国衆などの権力編成が明確化するにしたがい、それぞれが形成する拠点

の重層性も顕著になる。ただし、強力な大名権力が成長すると、家臣が官僚として大名城下で勤務する傾向が強まり、拠点の集中、一元化の進展がみられる。武家内部のこうした統合と、城下町が経済・流通を束ね、宗教勢力もとりこんでゆく過程は同時並行で進展する。とはいえ、戦国大名権力が必ずしも卓越していない地域では、こうした編成は必ずしも普遍的ではなく、統一権力(豊臣政権)の介入・後援を得るまでそれが実現しない地域も多い。

中世の「首都」論は、こうした地方拠点とは一線を画す。京都の將軍御所は、規模は圧倒的に大きいものの、構造は一般の武家邸と変わらず、最後まで邸宅であった。豊臣期においても、流通する商品や課税のあり方は他の武家拠点とは大いに異なつた。ただ、「首都」としての京都の達成点は、十六世紀末における天下一統の過程で地方における武家拠点の権力統合のモデルとされた。一方、関東における極である鎌倉府には、関東各地から武士が参勤に来ていたようで、これもまた「首都」京都の敷衍といえるだろう。

近世初期江戸の町並み開発は、戦国期の町場のあり方を超越し、地形の大規模な改変をとめないながらなされた。都市建設における地形改変は権力者によつて好んで用いられた手法であり、近世における「首都」の力量をいかなく発揮するものであつた。

本書で説明される武家拠点や関係する地域社会の成立・展開のあり方から、日本中世社会の多様性と特質を読みとつていただきたい。

二〇二五年四月

仁木 宏